



父さんごめんね
母さんごめんね

親を見つめて六十年

時実新子

父さんごめんね
母さんごめんね

—— 親を見つめて六十年

時実新子

著者略歴

一九二九年、岡山県生まれ。川柳作家。季刊誌『川柳展望』主宰。句集に『時実新子一萬句集』『猫の花』『有夫恋』『新子聚花』、小説・エッセイに『小説 新子』『花の結び目』『愛ゆらり』『愛のうた恋のうた』、編著書に『遊びせんとや——川柳新子座'92』などがある。

父さんごめんね 母さんごめんね

一九九三年六月十六日 第一刷発行

著者——時実新子

装幀——山岸義明

© Shinko Tokizane 1993. Printed in Japan



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三三二 郵便番号二二〇

電話 出版部 ○三―五三九五―三五二二

販売部 ○三―五三九五―三六二二

製作部 ○三―五三九五―三六一五

印刷所——株式会社精興社 製本所——黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは学芸図書第二出版部にてお願いいたします。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

定価はカバーに印刷してあります。

ISBN4-06-205283-0

はじめに——母逝けり父逝けり

人は、親に死なれるところも自分の輪郭が鮮明になるものだろうか。黒い切り絵のようにくつきりと人生から切り抜かれた五体がヒリヒリと痛い。

防波堤がとつぜんかき消えて、一步踏み出せばそこはもう海（死）という感覚も、私にとっては初めての体験である。

六十歳を過ぎて両親が揃っているふしぎをふしぎと考えたこともなく、私の親だけは未
来永劫生きつづけるような錯覚の中でうかうかと生きていた私を、まず、ノックアウトし
たのが母だった。

母逝けり 平成三年七月二十八日

アフリカの子の眼を持ってり病む母は

別れの日 出産予定日のごとく

船長に海図きつちり見えている

葉ざくらに母を隠してしまいたし

枕浮く 病母の枕ことさらに

一丁の草刈鎌が欲しい母

ガバと起き母を奪いに病院へ

母の視線がわたくしを不思議がる

どんな顔してよいのやらお母さん

見おろして母に言いたいことがある

でも 母の爪はわたくしにそっくり

いいからいいからと私が言っている

いまさらに母を酷使の姉いもと

ひりひりとひりと昔がなつかしい

ふり向くと母の眼窩に蛍かな

逃げ出してふーと姉妹きょうだい息をつく

にんじんの考えること愛のこと
じゃがいもの考えること恋のこと
わたくしの考えること母のこと

欠伸して私の母は骨と皮

もう母は見ようとしないお月様

自じ転車てんが一台雨あめに打たれている

黒鴉くろあひ一声私わたくし一哭なみだ母逝けり

枝くべて下さいむごい雨だから

覗く井戸三分五分母ははが浮く

口紅くちびるの人形あそび亡母ははの顔

ゆらゆらと亡母を置いて買物に

トマトの赤リンゴの赤に母あらず

指を切る草しごくとき母の声

ちよつとしたはずみに母がまた見えず

夕ざくら父が泣くので散りはじめ

母の髪はらら私の髪はらら

うつぶせば亡母仰向けば父と逢う

父が死んだのは救急車に乗った日から数えて四十四日目の夕方だった。平成四年六月十日、父、九十六歳であった。

父逝けり 平成四年六月十日

ICUなぶりごろしの父の首

ころしてと片手拝みをされて泣く

父も目を開けて泣くなり親子なり

木には風 父に瀕死の息つづく

父よと小声父よと小声大声に

拷問の父 麗麗と若き医師

延命の器具るいるいと父を巻く

今出来る孝行 管を切ることだ

父の死を待つわたくしはわたくしは

幼きは待ったよ父の靴音を

今待つは父の呼吸が止まること

はじめに——母逝けり父逝けり

つらくとも父と訣れてあげること
すべる廊下で医師の白衣に取り縋る

父が呼ぶ名神道路無風たり

父はもう目隠しされて機械音

手を握る握り返してくれそうで

頬に頬 まだつめたくはない父だ

死なないで！ あらん限りの取り乱し

心電図水平 うつくしい緑

花菖蒲さやさや生きて父逝きぬ

担送車つめたい父が寄りかかる

斎場の雀くろぐる身に近し

はじめに——母逝けり父逝けり

七七忌母に重なる父の骨

姉と目を初めて合わす墓の前

父を押す そんな気持ちはなかったか

がったんとして親を亡くした夏の空

吉井川 父よ母よと溯る

不孝者 親を暴いて晴れるペン

父さんごめんね 母さんごめんね／目次

—— 親を見つめて六十年

はじめに——母逝けり父逝けり

アカシアの木陰で 13

姉の父 私の父 24

父が死んだ 35

棺の中の顔 46

ホスピスで一足先に逝った母 53

抱いだき合う骨と骨 66

私だけのレクイエム 73

父の母・ウメのこと 76

生命の川——吉井川に守られて 88

姉と妹 100

母の母・クニのこと 114

一途な愛とエゴイズム 128

運命——姉と妹それぞれの結婚 138

出さずにしまった父と母への手紙 145

父の心中事件 158

母・ウメの死を看とる 168

姉の家出と離婚 178

親は要りませぬ橋から唾を吐く 190

一切の音信を絶つ 205

私、結婚しました 217

櫓ろの音が聴こえる 224

あとがき 228

アカシアの木陰で

病院前のアカシアの木は六月の湿気を吸ってひとときわ緑を増したようである。たった一本のその木を囲んで円形にベンチが置かれている。国道沿いの病院の、それが唯一の木陰である。

車椅子の老婆のまわりに五、六人の人がいて思い思いに紙箱のジュースを吸っている。ズブーッと飲み干した箱をぎゅっとつぶして遠くの屑籠に投げたのは老婆の息子だろうか。箱は籠に入らず男は軽い舌打ちをした。老婆はいえ、白髪を短く刈られて不似合いなピンク色のパジャマを着せられ、仰向いてアカシアの木のでっぺんに目を据えている。時折り泡のたまる老婆の口のあたりをガーゼで拭いているのが娘だろう。六十近いそ

の女の手がだらりと垂れた老婆の手指にそっくりだ。爪まで似るなんて親子ってつらいなあと思ったりする。赤いブラウスの女は誰？

古びた木製のベンチを軽業のように渡り歩いてはその一団へ戻ってくるチビたちは老婆の曾孫だろうが、誰も関心を示さない。他にアベックが二組背中を見せている。片方がパジャマというところが公園のベンチとちがう景色である。

ところで私はここで何をしているのだろうか。音のない絵の中で私も絵になりきっている。いつになく持って来た黄色いポストンバッグには喪服が入っているのだが、それよりもベンチの釘に引っかけたストッキングをどうしようかなどと考えている。

早く、一刻も早く父の枕辺へ急がねばならないのに、私はロダンの〈考える人〉の姿勢で石になってしまっている。

こわいのだ。たまらなくこわいのだ。

父が救急車でこの病院に運ばれてきて以来、いや、去年母を亡くした前後から今日という日は約束されていたというのに、今になって身が震えるとは何たることか。だから私は石になり絵になって自分をごまかそうとしているのにちがいない。

「やあ恵美さん来てくれたの」